

ガストン・クテとその時代

吉 田 正 明

キーワード：ガストン・クテ，シャンソニエ，文芸キャバレー，労働運動，カフェ・コンセール

1. はじめに

30歳という若さでこの世を去ったガストン・クテ Gaston Couté (1880-1911) は、19世紀末から20世紀初頭にかけてパリのモンマルトルを中心に活躍したシャンソニエ詩人 *poète-chansonnier* である。しかし彼の名は文学史にも学校の教科書にも載ることもなく、これまでアカデミックな研究対象にされることもほとんどなかった作家といえる。しかし彼の残した作品が多くの熱烈なファンを獲得し、没後も繰り返し取り上げられ、多くの歌手によって歌われ続けている事実が示すように、彼の作品は今なおその生命力と魅力を失っていない¹。また彼の詩はマックス・ジャコブに愛読され、ピエール・セゲルスによって詩人叢書に加えられもし²、1980年には彼のシャンソンに捧げられたレコードがアカデミー・シャルル・クロス大賞に輝いた事実もそのことを物語っている³。彼の文芸活動と作品は正統な文学史の圏外に位置付けられるものである。すなわち、まずはモンマルトルやカルチエ・ラタンの文芸キャバレーにおいて、次にアナキーな戦闘的労働運動の中において、そして正統な文学から最も外れた大衆娯楽の花形であったカフェ・コンセールの場において。世紀末のフランスにおいてこれら3つの場はいずれも活況を呈し、そこでは新聞や雑誌やイラスト付き歌詞などの多くの出版物が作られ流布していった。しかしなによりもそれらの場を彩り特徴づけていたのは歌や朗読や寸劇などの口承文化であり、それらは社会の変貌とともに新たな社会的・経済的条件のもと（都市開発、娯楽の発展、新しい読者層の誕生、マスメディアの発達等）、それに適応しつつそれらの場を大いに盛り上げ活気づけていたのである。

クテが関わった上記3つの場にはそれぞれ固有の特徴があり、それに関係した作家やアーティストや聴衆も異なっている。しかしそれらは決して固定化され閉じられた世界ではなく、それぞれ互いに交錯し影響を及ぼし合っていたのであり、クテの例が示すようにそれら3つの場に同時に関わった作家や芸術家もいたのである。

一見すると、クテの作品は、初期の抒情的なものもあるが、概してボース地方の方言や俗語が随所に散りばめられ、当時のブルジョワ社会に対する辛辣な風刺や反抗を歌ったものが

¹ クテのシャンソンは Marc Robine, Edith Piaf, Jacques Douai, Marcel Amont, Cora Vaucaire, Monique Morelli, Marc Ogeret, Bernard Lavilliers などの有名歌手の他、現代においても jazzkor などのラップやヒップホップのグループによっても取り上げられ歌われている。

² *La Chanson d'un gâs qu'à mal tourné*, Seghers, 1961

³ これまでに刊行されたクテの作品集としては、*La Chanson d'un gâs qu'à mal tourné : Poésies de Gaston Couté*, Saint-Denis, Le Vent du Ch'min, cinq volumes et un glossaire, 1976-1980が質量ともに最良の版である。

多く、ランボーを彷彿とさせるところがある。彼の使うボース方言に馴染みのない読者や聴者にとってそれはあたかも未知なる言語に接するかのようである。それではなぜ彼の作品が当時もてはやされ、詩人の没後も一部の熱烈なファンを獲得し、有力な歌手によって歌い継がれ、彼のシャンソンを聞く者に感銘を与え続けているのであろうか？ それを探るには彼の作品を詳細に分析し考察する他はないが、その前提として、本国フランスでもあまり知られておらず、日本においては名前すらほとんど知られていないこの「呪われた詩人⁴」の生涯を明らかにし、検証してみる必要がある。それが本稿の目的であるが、ここでは彼の生い立ちからモンマルトルでシャンソニエ詩人として大成するまでの軌跡を、彼の生きた時代背景とともに辿っていききたい。

2. 幼少期と青年期

ガストン・クテは1880年9月23日、オルレアンを県庁所在地とするロワレ県ボージャンシー Beaugency で生まれた⁵。その2年後に一家はマン＝シュール＝ロワール Meung-sur-Loire のクランの製粉所 moulin de Clan に移り住む。この製粉所はその地方の主要な3つの水車のうちの一つを有し、当時およそ30基の水車が稼働していた穀倉地帯のボース平野の西のはずれに位置していた。父ウージェーヌは彼の製粉所を精力的かつ効率的に管理経営し、新しい技術を積極的に導入するとともに、ブドウ栽培をも手がけたことで、一家は比較的豊かな生活を営むことができ、親類や友人たちを迎えてもてなすことも多かった。幼少期にガストンが目にした小麦、ブドウ、流れる水といったイメージは、詩人の心象風景の中に深く刻まれ留まり続けることとなる。

彼の父親は1880年代に政治や社会問題に関心を寄せ自ら積極的に意見を表明するようになる小企業主、商店主、職人、自由業者などからなる新たな中産階級に属していた。彼らは農民たちとともに安定化に向かいつつあった共和政の支持基盤をなしていた。クテの唯一の姉ローザは1889年に豚肉屋の息子と結婚するが、その義兄は父親の営んでいた製粉所を共同経営するようになり、後にマン＝シュール＝ロワールの村長にまでなる人物であるが、クテはその義兄とは馬が合わず、後に *Môssieu Imbu* の中で共和派の村長のモデルとなり、辛辣な風刺の対象となっている。

1885年から彼は村立小学校に通いはじめ、1891年には郡で一番の成績で学業修了証を授与されるほどの優等生であった。当時新しい教育制度のもとで整備された初等教育は急速に発展し⁶、上述した新たな社会層の子弟に出世への道を拓くことになる。実際初等教育修了証によって、官僚試験の受験資格が得られたし、師範学校への進学道もそれによって開かれることとなる。クテは国語（フランス語）では常に優秀な成績を修め、歴史も得意科目であった。その頃彼はすでに短編や詩を書き始めている。しかし生来活発で悪戯好きな性格で

⁴ ヴェルレーヌの書物の題名として有名になったこの言葉をクテにも当てはめたのは、Roger Monclin, *Gaston Couté, poète maudit*, Paris / Bruxelles, Pensée et Action, 1962であり、この表現を再び使ったのは、Élisabeth Pillet, *Gaston Couté, le dernier des poètes maudits, Chanson, poésie et anarchisme à la Belle Époque*, Presses universitaires de la Méditerranée, 2011である。

⁵ クテの伝記としては、Louis Lanoizelée, *Gaston Couté*, Paris, chez l'auteur, 1960が挙げられる。上記注4に記したÉlisabeth Pilletの研究書はこれに依拠しつつさらに新たな資料を加えてクテを論じたもので、現時点で最も綿密で信頼のおける参考文献である。本稿はこれらに多くを負っている。

あった彼は、学校の規則や拘束を嫌って問題行動や騒動を引き起こす生徒でもあった。休暇中は製粉所を自発的に手伝いはしたが、それよりもむしろ読書に没頭することのほうが多かった。

1895年、クテは初等教育修了試験に落第する。クテの伝記を書いた Louis Lanoizelée によると、試験のとき彼は隣の席で受験していた国語の苦手な友だちに自分の答案を写させてやり、そのために時間を取られてしまい、第2問の論述問題を解答する時間が足りなくなってしまったことを伝えている⁷。その結果、クテは得意の国語の点数を稼ぐことができず、苦手の数学の点をカバーしきれずに落第し、一方彼の答案をカンニングした友だちの方はまんまと合格してしまったという。同年15歳になったクテは、パリコミュヌに参加した社会主義詩人 Clovis Hugues の作品に夢中になる。初等教育修了試験の自業自得ともいえる失敗の一方で、彼はクロヴィス・ユグの作品を通して革命思想や社会主義思想に触れそれに共感する。実際、共和政を支持していた有権者の中で最も民衆寄りの立場に立つ人びとにとって、深刻な社会問題や経済危機に対して有効な政策を講じることのできない政府への失望と不満が高まっていた。そうした状況のなか、右翼の保守派が勢力を増す一方、労働運動が激しいストライキ活動を通じて組織化されていく。それに呼応するように無政府主義や社会主義の思想が広まっていき多くの作家や芸術家たちを引きつけていた。1893年以降次々に政権交代を繰り返し不安定さを増した国内情勢の中、それに乗じて過激なアナキストによるテロ行為が激化すると、1894年の無政府主義者の陰謀事件を機に「極悪法」*lois scélérates* が施行され無政府主義者や社会主義者の厳しい弾圧がはじまる⁸。クテはなおも数年間は学業を続けはするが、それは彼を安定した職に就けたいと願っていた両親の希望に従ったまでのことで、しだいに彼は学業よりも当時流行していた革命思想や社会主義思想に傾倒していく。

1895年秋、クテはオルレアンのポティエ高等学校 *lycée Pothier* に入学する。当時リセは有料で進学することができたのはまだ一部のエリートに限られていた。彼が選択したのは当時新たに台頭してきた中産階級出身の子弟の教育のために1891年に設けられた現代教育課程 *section moderne* であった。しかしそこでの教育は権威主義的で教育内容も旧態依然とした古典主義的なものであった。生来の気質からしてクテがそのような教育に興味を持つことができなかつたのも当然である。彼は学校の授業よりも芸術や演劇のクラブ活動の方に熱心に参加する。その反抗心が災いして彼は日曜日の禁足処分を受けることもしばしばあり、危うく退学処分になりそうになったことも何度かあった。彼が2学年下のピエール・マッコルラン Pierre Mac-Orlan (本名 Pierre Dumarchey) と出会ったのも、校長から譴責処分を受けるため待機していた待合室であった。お互い意気投合した二人はその時以来友情を結ぶこと

⁶ 1880年代の共和政にとってもっとも重要な課題は学校教育、特に初等教育政策であり、その最大の目的は教育の場からカトリック教会の影響力を排除すること、すなわち教育の世俗化であった。首相そして公教育大臣としてこれを強力に推し進めたフェリーは、1881年から82年にかけての3つの法律、いわゆるフェリー法によって、初等教育の無償化・義務化・世俗化を実現した。また、中等教育に関しては、女子教育機関の整備(カミーユ・セー法、1880年)などが行われた。

⁷ Louis Lanoizelée, *op. cit.*, pp.28-29. Élisabeth Pillet, *op. cit.*, p.58参照。

⁸ この「極悪法」の制定により反体制を喧伝するプロパガンダは厳しく取り締まられ罰せられることになり、激しいテロ活動は収束するが、革命思想の伝播を抑えるまでにはいたらなかった。

になる。後にマッコランはクテのことを社会的に認められることには無関心で、独立独歩を貫く人物として描いている⁹。

学校生活での束縛や興味のもてない授業に耐えきれなくなったクテは1887年にリセを中退し、まずはオルレアン徴税事務所で、ついで同じロワレ県アングレノの税務署で働き始める。こうして彼は学校での学業を放棄し、自活して別の方法で文筆活動への道を模索することとなる。彼が最初に身を投じたのは、当時マスメディアとしてますます発展し、しばしば詩やシャンソンなども掲載していた新聞界であった。最初はごく地味な出だしであった。まずは『フランスの製粉業』*La Meunerie française* という地元の定期刊行物に最初の記事を投稿した後、彼は、速記術の普及を図るために月2回発行されていた *Revue littéraire et sténographique du Centre* というささやかな雑誌の文芸欄を担当していたアンリ・ダ・コスタという人物と知り合いになる。クテはその雑誌に1897年4月から1898年8月にかけて13篇の短編と詩を投稿している¹⁰。投稿の際、彼は最初は Gaston Koutay というペンネームを使い、つぎに Pierre Printemps と署名し、そして最後は本名を使用している。クテはまた1898年に *Les Aydes fin de siècle* という謄写版による地元の小雑誌に数篇の詩を寄稿している。

これらの初期作品は、真摯で写実的な短編やユーモアに溢れた風刺的な散文であったり、中世趣味を打ち出した物語や詩であったり、ユゴーの詩（例えば *Pauvres gens*）を彷彿とさせる人道的な詩であったり、あるいはデカダン派やサンボリストの影響を感じさせる抒情的な詩などであるが、まだ手探り状態で異なるいくつかの形式を試みた習作にとどまっていると言えよう。詩に関して言えば、定型詩はソネが1篇、バラードが1篇（復讐心に満ちた戦闘的な「ジャンヌへのバラード」*Ballade à Jehanne*）あるのみで、ほとんどがより自由な形式を用いたシャンソンが大半を占めており、後のシャンソニエ詩人を予告している。

この頃のクテの様子をある友が次のように描写している。

彼は頑固なまでにいつもつば広のフェルト帽を被り、その長髪と、冷やかすような口元と、悪戯っぽい目つきでもって他の仲間と一線を画していた。口数は少なかったが、たくさん書いていた。クテの作品には彼が諳んじていたフランソワ・ヴィヨンの影響が窺えた。彼はしばしば次のような詩句を口ずさんでいた。

嗚呼！神よ！もし俺が狂った青春期に	Hal! Dieu! si j'eusse étudié
真面目に勉学に励んでいたなら	Au tems de ma jeunesse folle
身持ち正しく暮らしていたなら今頃は	Et à bonnes mœurs dédié
紋章と柔らかな褥を手にしたのに	J'eusse blason et couche molle ¹¹

⁹ « Hommage », préface de Pierre Mac,Orlan à la plaquette de Roger Monclin, *Gaston Couté, poète maudit (1880-1911)*, Pensée et action, Paris / Bruxelles, 1962参照。

¹⁰ Gaston Couté, *La Chanson d'un gâs qu'a mal tourné*, Saint-Denis, Le Vent du Ch'min, 1981, t. 3, « Œuvres jeunes » 参照。

¹¹ Saint-Simonin: « Les œuvres du chansonnier beauceron Gaston Couté : Quelques souvenirs personnels », *Le Journal du Loiret*, 28 juin 1928. Élisabeth Pillet, *op. cit.* pp.60-61参照。なお、本稿の引用文の和訳はすべて執筆者の私訳である。

他の証言と照らし合わせると、ヴィヨンはクテにとって文学的というよりは象徴的な存在としてしばしば言及されていたようである（クテ自身ヴィヨンのことを「先祖」ancêtreと呼んでいた）。ヴィヨンはかつてクテの住んでいたマン＝シュール＝ロワールの牢獄に一時収監されていたことを思い起こそう。それに何よりもクテに限らず、ヴィヨンは当時パリの文芸キャバレーに出入りしていたボヘミアン詩人たちにもてはやされていた詩人であったのである。クテは文学を志す同時代の多くの若者たち同様、パリの文芸キャバレーに惹きつけられていた。1897年と1898年に彼はアリストイッド・ブリュアンが発行していた『ラ・ランテルヌ・ド・ブリュアン』に数篇の詩を投稿する。ブリュアンは送られてきたそれらの詩を本誌に掲載することはなかったが、通信欄で簡単にそれらの詩に触れている¹²。その通信欄で言及されている3篇の詩のうち、唯一「最後の壺」*La Dernière Bouteille*だけが後に出版されることとなる。それぞれ末尾にルフランを配した3詩節からなるこの詩は、クテがはじめて老農夫の口を借りてボース方言を用いて作詩したものである。このように農民を語り手にして方言を使って書かれた詩は、当時の地方誌に少しずつ発表されはじめていた。ブリュアンもこうした地方の民衆が使う方言を使って書かれた詩を彼の雑誌に歓迎していた。ブリュアン自身も当時は以前使用していたパリの場末のならず者の隠語によるシャンソンを書くのをやめて、田舎の放浪者を好んで語り手にしていた。エリザベット・ピレは、クテの使用した方言は言語的特徴から見てブルゴーニュの詩人 Fernand Clas の用いた方言に類似していることを指摘している¹³。

当時フランスの主要な地方都市でも、パリに倣った文芸キャバレーが盛況で多くの地方在住の若き詩人たちを集めていた。クテが働いていたオルレアンにおいても、民衆の使う方言や表現を使って作詩していた大ブルジョワの Paul Besnard のまわりに集った若き作家たちが、『フランスの庭』*Le Jardin de la France* という地方誌に作品を寄稿していた。彼らは日曜日にマルトロワ広場 place Martrois に集まって自作の詩を朗読したりシャンソンを歌ったりしていた。彼らはその広場の名前 place Martrois をもじって、自分たち若き詩人グループのことを「マルトロワ山の詩人とシャンソニエ」Poètes et chansonniers du Mont-Martrois と命名していた。クテが一般の聴衆を前にして、自作の詩を朗読して華々しくデビューしたのはそこにおいてであった¹⁴。詩人グループの集いが成功を収めると、彼らの集合場所はカフェからより広々とした市立ホールへ、それから小劇場へと移されることになる。劇場の使用料を払うために有料（1～2フラン）となった彼らの集いは、そのため聴衆の選別が進むこととなる。当時の労働者の平均的な日当は約1フランだったので、その入場料は彼らにとっては高価であったのである。まだアマチュアであったクテのオルレアン文芸キャバレーでの舞台デビューは、ブルジョワの聴衆の期待に応えるというよりはむしろそれに対峙するといった態のものであったようである。クテとキャバレーの聴衆との間には張

¹² *La Lanterne de Bruant*, n° 11 et 18 (1897), n° 28 (1898). Élisabeth Pillet, *ibid.*, p.61参照。

¹³ Élisabeth Pillet, *ibid.*

¹⁴ 詩人グループの一員であった Jean Gay の回想によると、クテの作品はその個性的なヴィジョンによって、ブルジョワや知識人も一部混じっていた聴衆に大きな反響を及ぼしたという。Jean Gay : « Les poètes du Val de Loire : Gaston Couté », *Blois et le Loir-et-Cher*, Blois, juillet-septembre 1944. Élisabeth Pillet, *ibid.*, p.62参照。

り詰めた緊張感が支配し、それはアーティストと聴衆との目線や所作などの非言語コミュニケーションのうちに窺い知れた¹⁵。一方、彼の当時の作品にはまだ反抗詩人としての相貌は現れておらず、ほとんどが無害な内容のものである。

しかし1898年夏頃になると、彼はより政治や社会情勢に目を向けた作品を書くようになる。クテは保守化に傾きつつあった当時の共和国政府に対する不満を表明していた急進左派の思想に共感を覚えそれに接近しはじめるのである。実際、1896年以來、共和国政府は左派と一線を画すようになり、反教権主義を排し右派の支持を仰ぐようになっていた。そのようななか野党は結束し、社会主義党員が1896年の市町村議会選挙において多くの地方都市で当選を果たし、彼らのうち一部の者はこのような政治情勢のもとで社会主義理論の構築を図るのである。共和主義者のなかでも急進派や急進社会主義者たちは彼らの掲げる理想が政府に裏切られたと感じていた。彼らはカトリック教会と強く結びついた伝統主義的なブルジョワの名士たちの支配から民衆を解放することを目指し、断固とした反教権主義を掲げて結束していく。急進派の若者たちがこうした潮流のなか組織化に向けて大きな役割を果たす。フランス全土で地方議会や県議会の委員会が立ち上がり、フリーメーソンの各支部やローカル紙との結束を固めていく。こうしたダイナミックな政治の流れを受け、1898年の総選挙において急進派が勝利し新たな政治情勢が生み出される。

このような社会情勢のなか、1898年8月、オルレアンで新たな日刊紙『ロワレの進歩』*Le Progrès du Loiret*が創刊される。18歳になったクテは意を決して税務署を辞め、その新聞に編集者として雇われることになる。これは『オルレアンの共和派』*Le Républicain orléanais*という日刊紙を引き継いだもので、この旧紙は選挙戦において民主共和派の候補者を支持しなかったため廃刊に追い込まれたのである。本紙の創刊号の社説欄は「前進せよ！本当の共和国のために、すなわち民衆のための。」という一文で締めくくられていた¹⁶。徹底した反教権主義を掲げる『ロワレの進歩』紙は、当時の新聞としては珍しくドレフィス擁護派でもあった。実際、1898年初頭にゾラが『オロール』紙において軍部を弾劾する「*J'accuse*」を発して以來、急進派も社会主義者もドレフィス事件をめぐるには両陣営に分裂して激しく論戦を繰り広げており、大部分の新聞は反ドレフィス派に与していた。『ロワレの進歩』は発刊当初はごく小規模な日刊紙であり、創刊者の主筆の他は編集者のクテだけであった。しかしこれは当時としては決して珍しことではなかった。こうして若きクテはオルレアンに移住することになるが、およそ20キロ離れた親元のマン＝シュール＝ロワールには当時流行りはじめた自転車でしばしば帰省している。その年の8月から10月にかけてクテはその新聞に地方記事を署名なしで書いた他、公教要理を習う娘たちにダンスをするのを禁じた司祭に対しての抗議文を、辛辣な調子の2通の「マンの司祭への公開状」*Lettres ouvertes à M. le Curé de Meung*と題して発表し、自作の詩8篇を本紙に掲載している¹⁷。

¹⁵ オルレアンの文芸キャバレーでのクテの舞台の様子については、上記ジャン・ゲーの回想で語られている。Élisabeth Pillet, *ibid.*

¹⁶ « En avant ! Pour la vraie république, celle du Peuple. » Élisabeth Pillet, *ibid.*, p.63参照。

¹⁷ *La dernière Bouteille, Idylle rouge, Un bon Métier, Gueux, Les trois Chansons du carillon, Le Champ de naviois, Variation sur l'air de Malbrough, Le pauvre Gars*の8篇がそれである。Élisabeth Pillet, *ibid.*, p.64参照。

彼はこれ以降本名で署名することになる。ここに掲載された詩はそれ以前の作とは明らかに異なっており、そのうちのいくつかは社会問題や反教権主義をテーマにしたものである。「最後の壺」*La Dernière bouteille* は本紙にはじめて発表されたものである。クテは発話の主体を農民に置き、「よき仕事」*Un Bon métier* と「かぶ畑」*Le Champ de naviois* の2篇では、オルレアン方言を使って創作している。特に後者の詩には新聞の一購読者から次のような批判が寄せられる。

民衆を活気づけ、民衆のために書いたり話したりする作家や弁士は、民衆の言語を使うことを厳に慎むべきである。まるで民衆があらゆるニュアンスや繊細さに富んだ正しく美しいフランス語を解さないかのようなものである¹⁸。

この購読者からの批判を気にしてか、若き詩人はその後に発表した2篇の詩では標準的なフランス語を使っている。しかしこの2篇を最後に彼は臆することなく決然としてボース方言を使って詩作していくようになるのである。

こうした中クテが家族のもとに滞在していたとき、シャンソニエのカステロ *Castello* に率いられたモンマルトルの芸術家の一団が地方巡業でマン＝シュール＝ロワールのカフェにやって来て夜の興行を行う。クテは何人かの友人とともにそれを見物に行く。興行の最後にカステロが聴衆に対して自作の詩の朗読を促すと、若き詩人はそれに応えて2篇の詩を朗読する。そのうちの1篇が新聞の読者の批判を招いた「かぶ畑」であったが、今回は聴衆の喝采を浴びることになる。カステロもまたクテが朗読した詩に驚いて興味を示し、方言を使ったその独特の詩作を続けていくよう若き詩人を励ますと同時に、パリのキャバレーで運を試すよう勧めたのである。この激励と誘いを受けてクテはパリに行く決心をする。両親にはパリで職が見つかったと嘘をつき、路銀としてもらった100フランを携えて、彼は『ロワレの進歩』の編集者を辞しオルレアンからパリへと旅立つことになったのである。かくしてクテのパリのキャバレーの舞台でのプロフェッショナルなシャンソニエ詩人としての新たな一歩が踏み出されることとなる。

3. モンマルトルのボヘミアン生活

クテがどのような経緯でパリのキャバレーの舞台に立つようになったのかその詳細は不明であるが、ただ彼が親から餞別としてもらった100フランをすぐに使い果たしてしまい、数週間は食べることもホテルで泊まることもままならない困窮状態に置かれていたであろうことは想像に難くない。しかし1898年11月に彼はモンマルトルに開店してまもない *Al'Tartaine* (バターやジャムを塗った薄切りのパンを意味する *la tartine* の方言) という小さなキャバレーの舞台に立つことになる。このときもまた店主の興味を引いたのは件のボース方言による *Le Champ de naviois* であった。若き新人シャンソニエにはまだギャラが支払われることはなかったが、飲食代だけは無料であった。しかし彼はそこでパリの観客を前にして初舞台を踏み、何人かの芸術家とも知り合いになる。そのなかには彼の何篇かのシャン

¹⁸ 購読者から本紙の寄稿欄に送られた文。« À nos poètes ! », 6 septembre 1898. Élisabeth Pillet, *ibid.* 参照。

ソンに曲付けしてくれることになる Eugène Manescau や、無学ながら優れた歌唱力の持ち主であったアナキー歌手 Buffalo, あるいは彼の友となる文人 Maurice Lucas などが含まれていた。同年12月にクテは《アル・タルテーヌ》から当時流行っていたキャバレーのひとつである《赤いロバ》*L'Âne Rouge* に移る。そこでのクテの舞台の様子を観客の一人が後に次のように回想している。

我々は舞台に向かう一人の若者を見た。彼はオーバーを羽織りこれ見よがしにフェルト帽を被り、青白い顔で目には辛辣な皮肉をたたえ、首元まで垂らした長い黒髪がその目を縁取っていた。彼は身振りも挨拶もせずベリー地方の方言に似たゆったりとしたなまりで、完璧な形式の熱烈で飾り気のない言語で作られたいくつかの詩を朗読した。その若者のぎくしゃくしたまだ不器用な朗誦から、強烈な郷土色と冷酷な風刺と厳しい哲学が発散していた。クテはこのように朗誦法にまだ不慣れな声で熱烈かつ真摯に「かぶ畑」*Le Champ de naviois*, 「気がふれた男」*Gas qu'a perdu l'esprit*, 「良き仕事」*Un bon Métier* を朗読した後、彼を称える聴衆の喝采に気をとめることもなく、お礼の挨拶として帽子をあげもせずに自分のテーブルに戻り、そこで彼の出演料のかわりとなるカフェオレを飲み、そして立ち去っていった¹⁹。

この後クテの知名度は急速にあがり、次に雇われた《フナンビュル》座のアペリティフ・コンサートでは一晚3.5フランの出演料をもらうようになり、やがて当時キャバレー界で一世を風靡していたシンガーソングライターの Jules Mévisto が《フナンビュル》座の興業プロデューサーになると、クテの出演料は一晚5フランにあがった。多くのパリの観客とモンマルトルの芸術家たちがクテの存在に注目するようになったのはそこにおいてである。ジャン・リクチュス Jehan Rictus もその一人であった。リクチュスは、クテが亡くなった直後に追悼記事を書き、若き詩人の売り出しに自分が一役買ったと述べているが、リクチュスはクテの存命中に彼の記事を書いたことは一度もなかったので、この証言は信憑性に欠けるきらいがある²⁰。一方、クテが人気を獲得してもはやされはじめた頃に書かれたレオン・ド・ベルシーの『モンマルトルとシャンソン：詩人とシャンソニエ』（1902）には、新人で年下のクテとすでにパリのキャバレーで名声を確立していたリクチュスとの比較が次のように書かれている。

ガストン・クテは今では *Quat'-z-Arts* の舞台で詩を朗誦しており、それまでそこで活躍していたジャン・リクチュスに取って代わった。この二人の詩人にはよく似たところがあり、彼らはともに優しい哀れみの情に突き動かされ、不公平な社会に対する嫌悪感を抱いていた。しかしリクチュスが嘆き節を朗誦するのに対し、クテの方は社会の不正

¹⁹ Maurice Dauray, « La boîte aux souvenirs : Gaston Couté en Berri », *La Gargaillou*, Châteauroux, n° 2, 15 mai 1925. Élisabeth Pillet, *ibid.*, p.65参照。

²⁰ リクチュスのクテ追悼記事は、クテが死の直前まで定期的に記事を書いていた新聞 *La Guerre sociale* に掲載を断られたため、1911年7月8日の *Les Hommes du jour* に載ったものである。Élisabeth Pillet, *ibid.*, p.66参照。

に対して叫びをあげるのである。クテにあっては反抗心がよりたぎっていた。それはおそらく彼がより若くデビューしてまもない新人で、そのためまだ人生に幻滅していなかったためであろう。付け加えて言うと、クテの使う方言は、あまりにも人為的で文学的なリクテュスの隠語よりもより適確であるように思われる。私はいつの日かモンマルトルの詩人たちのなかで最も若いクテが、われわれのキャバレーの客たちの人気を年上のリクテュスから奪い取り彼の影を薄れさせてしまったとしても決して驚かないであろう²¹。

ベルシーの予言通り、これ以降クテの人気は急上昇し、彼はモンマルトルやカルチエ・ラタンの有名キャバレーにつぎつぎに出演するようになる²²。上の引用でベルシーが触れていたキャバレー *les Quat'z'Arts* では、週に1回「マチネ・ポエティック」*matinée poétique* が開かれ、若い詩人たちに詩の発表の場が与えられていた。すでに有名になっていたクテも、自作の詩を朗読するためその詩の朗読会には定期的に出席している。彼はまた地方巡業にも加わり、1899年6月には地元の文芸サークル《黒いピエロ》*Pierrot Noir* に招かれてシャトールー *Châteauroux* への興業にモンマルトルの他の芸術家たちとともに参加したり、またベルギーにも数回公演に赴いている。

1899年秋、クテは《フナンビュル》座で世話になったメヴィストが支配人をしてきたキャバレー *les Noctambules* の舞台に立つ。上で引用した《赤いロバ》でのクテの舞台の様子を語ってくれた観客はその後もクテとの交友関係を続け、《ノクタンビュル》座での舞台の様子についてもつぎのように述懐している。

私は今でもクテが《ノクタンビュル》ではじめて「木のキリスト」*Le Christ en bois* を朗読したあの有名な夜の興業のことを憶えている。タバコの煙で濛々としたホールは満席だった。エリートからなる観客は（当時はカルチエ・ラタンのキャバレーにはエリートの知識人しか通わなかった）感銘を受けて、それまで経験したことのないような万雷の拍手で彼を称えた。一人の男が立ち上がり、舞台上に立ちつくし拍手喝さいに沸く観客席を困惑の混じった驚きとともに見つめていたクテに近寄っていき、彼を両腕で強く胸に押し付けた。ローラン・タイヤードは目に涙を浮かべてガストン・クテを抱きしめた。

クテはわれわれのお気に入りの席に戻ってくると、ストイックな彼が頬に二つの大粒の涙を流していた²³。

無政府主義に共鳴していたローラン・タイヤード *Laurent Tailhade* のクテに対するこの熱

²¹ Léon de Bercy, *Montmartre et ses chansons : poètes et chansonniers* (Éd. 1902), Hachette Livre, Bnf, p.262参照。

²² 人気を獲得したクテが当時出演したのは、*les Noctambules*, *le Grillon*, *le Conservatoire de Montmartre*, *le Carillon*, *le Cabaret des Arts*, *le Pa-Cha-Noir*, *l'Alouette*, *la Nouvelle Athènes*, *le Gringoire*, *les Quar'z'Arts* などのキャバレーである。Élisabeth Pillet, *op. cit.*, p.66参照。

²³ Maurice Dauray, *op. cit.*

狂ぶりは、その場に居合わせた多くの観客の共有するところであった。これ以後クテの作品は、ピエール・シュルジェール Pierre Surgères など他のキャバレーの歌手たちにも取り上げられ歌われることになる。また、マルセル・ルゲ Marcel Legay, ルイ・オギュアン Louis Auguin, レオ・ダニデルフ Léo Daniderff などの作曲家により彼の詩は曲付けされていく。カフェ・コンセールにおいてもクテのシャンソンは何人かの有名歌手によって歌われていく。例えば当時のトップスターであったメイヨール Mayol は、「気がふれた男」を歌い、1903年にはその歌をレコード録音している。とりわけ二人の歌手がクテの作品を専門にした。キャバレーにおいては、マン＝シュール＝ロワールの巡業のときクテを励ましパリ行きを勧めてくれたシャンソニエのカステロが、そしてカフェ・コンセールでは、労働組合運動の闘士でもあったレイモン・ブロカ Raymond Broka がクテの作品を持ち歌にした。ブロカはアーティストの権利を守るために結成された「オペラ歌手組合連合」l'Union syndicale des artistes lyriques の設立メンバーのひとりでもあった。彼はクテの作品を歌うときは、フランスの多くの地方の農民たちが着ていた青い作業服を身につけて歌ったが、この服装はテオドール・ボトレルが歌うときに身にまとったブルターニュの民族衣装とは意味合いがまったく異なるものである。

クテ自身もパリのキャバレーにデビューしたての頃は、黒いフェルト帽を被り農民の作業服を着て歌っていたことが伝えられている。1906年にグランジュアン Grandjouan によって描かれた彼の肖像画もそのいで立ちで描かれたものである。その後彼はその服装をやめ、普通のスーツ姿で歌うようになるが、何人かの証言によると、その歌い方はブラッサンスのように動作を最小限にとどめ、そっけなく単調であるが効果的な歌い方であったと伝えられている²⁴。クテはまた、他の多くのシャンソニエ仲間と同じように、ギャラが入る仕事以外に革命運動の闘士たちが企画した夜の集いにボランティアで参加することも多かった。彼は無政府主義者たちの思想に共鳴し、その活動に協力していたことが1900年11月のクテ関係の警察の報告書からも窺える。

クテはこの冬ジトン通りのアナーキストグループの夜の歌会に全面的に協力することを約束した。彼の姿は9区のピガール通り62番地とジトン通りで開かれた革命的社会主義者たちの委員会において目撃されている²⁵。

Journal du Peuple と *Libertaire* 両紙に協力したクテは、アナーキストグループによる夜会やコンサートにも協力している。

要するに、この人物は無政府主義の意見を表明し、アナーキストたちの活動に与している。彼は危険人物であるようには思われない。彼の名は犯罪記録簿には記載されていない²⁶。

²⁴ Henri Fabre, « La Chanson d'un gars qu'a mal tourné », *Les Hommes du Jour*, nouvelle série, no 3, 1er juillet 1928および Maussa, *Le Socialisme*, 8 juillet 1911参照。

²⁵ Archives de la préfecture de police, dossier Couté, 15 novembre 1900. Élisabeth Pillet, *ibid.*, p.68参照。

²⁶ *Ibid.*, 30 nov. 1900. Élisabeth Pillet, *ibid.* 参照。

極悪法の制定により過激なテロ活動が収まる1894年から第一次世界大戦までの間、無政府主義の思想は労働運動全体に、とりわけ労働組合運動を通して大きな影響を与える。しかし無政府主義の捉え方とその理想の実現の仕方は様々であり、それぞれの党派の機関紙にもそれが反映されている。それらの機関紙のなかで、セバスチャン・フォール Sébastien Faure によって出版されていた *Le Libertaire* 紙は、ドレフュス擁護の姿勢をいち早く表明した新聞であった。そのフォールは1899年に日刊紙 *Journal du Peuple* を創刊し、ドレフュス事件の推移を随時記事にする。その間 *Le Libertaire* は一時休刊となる。クテは1899年4月から12月の間に *Journal du Peuple* 紙に4篇の詩を寄稿している²⁷。1899年9月にドレフュスが特赦を受けフォールが *Le Libertaire* 紙を再刊すると、クテは10月から12月にかけてそこに5篇の詩を発表する²⁸。これらクテがフォールの新聞に発表した詩はみな社会への激しい反抗を歌ったものであるが、伝統的な作詩法に則って詩句の音節数をそろえ、いくつかの詩節によって構成されている。しかしクテは様々な形式をそこで試みており、常に視点を変化させてヴァリエーションをつけている。すなわちルフランを伴った短めの詩節により構成されたシャンソンもあれば、より複雑な展開を見せる長詩もあり、これらを交互に発表することで変化を持たせようとしていることが窺える。これはこれ以後もクテに一貫して見られる特徴である。いくつかのテキストは先達の有名なシャンソンを踏まえて書かれている。例えば *Le Libertaire* 紙に発表された「雄牛」*Taureaux* は、あたかも金槌で打ち据えるようなルフラン ≪ Bourgeois! nous sommes des taureaux ! ≫ は、ボードレールによっても評価され人口に膾炙されたピエール・デュポンの「牛」*Les Bœufs* を想起させる²⁹。これらの詩は語彙や綴り字法において正しく標準的なフランス語で書かれているものもあれば、方言を駆使して作られたものもある。発話形式と発話の主体も変化に富んでいる。話者は民衆であったり、少年 *gâs*³⁰ や落伍者 *traîneux* (標準的なフランス語では *traîneur* と綴られる) であったり、詩人自身が語り手となる場合もある。読者への呼びかけ、それもとりわけブルジョワの名士たち *bonnes gens* への呼びかけが多用されている。これらの詩のなかでも特に彼の代名詞ともなっている「不良少年」*Le Gâs qu'a mal tourné* をはじめとして、「新兵」*Les Conscrits*、「アナーキストの愛」*L'Amour anarchiste*、「木のキリスト」*Le Christ en bois* などはクテの読者たちから最も愛読され評価されている作品に他ならない。弱冠19歳の若さでクテは、それらの詩においてすでに力強く独創的な声を響かせている。確かに彼はブリュアンヤリクテュスの作品から影響を受けてはいるが、その一貫した反骨精神と独創的なエクリチュールにより彼らとは一線を画している。

²⁷ *La Chanson des corbeaux, Le Gâs qu'a perdu l'esprit, Les Conscrits, Le Gâs qu'a mal tourné* の4篇がそれである。

²⁸ *L'Amour anarchiste, Taureaux, Chanson de moisson, La Tête de mort, Le Christ en bois* の5篇がそれである。Élisabeth Pillet, *op. cit.*, p.68参照。

²⁹ デュポンの「牛」*Les Bœufs* は牛を総称するとともに「去勢された雄牛」を意味するが、クテの「雄牛」*Taureaux* の方は去勢されていない雄牛を指し、クテにおいてはブルジョワが支配する不公平な社会への反抗心と呪詛がよりいっそう感じられる。

³⁰ 標準的なフランス語では *gars* と綴られ、*garçon* の古い主格形から派生した語で、「少年」、「田舎の若者」の意で使われる。*gâs* という独特の綴りで使われているこの語はクテが好んで使う言葉であり、発話主体としての詩人のメンタリティーを象徴する語となっている。

当時の反体制派にあつては、大別すると労働組合運動に好意的なグループと敵対的なグループの二つが、かまびすしい論争を繰り返していった。さらにはその運動が複数の主義や傾向へ分派していった時期でもあった。すなわち新マルサス主義³¹、教育問題、協同組合運動、反軍国主義、ナチュリズム³²といった主義主張である。クテは、セバスチャン・フォール Sébastien Faure、ウジェーヌ・アンバール Eugène Humbert、ヴィクトール・メリック Victor Méric などの新マルサス主義の主導者たちと交友関係を結んでいた。フォールはまた革命を推進する上で教育の重要性を唱えた運動家たちのひとりでもあった。この思想を代表する最も重要な人物のひとりであったのがカタロニア人のフランシスコ・フェレ Francisco Ferrer である。教育の世俗化と合理主義化を唱えたフェレは1901年にバルセロナにこの原理に基づく学校を創立するが、フランスに亡命を余儀なくされ、そこで *L'École rénové* という雑誌を創刊する³³。それに続きフォールの方は1904年にランブイエ近郊に「ラ・リュージュ」la Ruche という「未来の学校」*école de l'avenir* を設立する³⁴。クテはフェレの思想に共感し、「ラ・リュージュ」を何度か訪問している。社会の不正に対する飽くなき反抗、反軍国主義、保守的な学校制度への批判、自然な生の擁護といったものがクテの作品には通底している。それゆえ彼は女性のみならず男性をも抑圧し苦しめているブルジョワジーの偽善的で自然に反する性道徳を断固として拒否し、自由なる愛を擁護するのである。クテは1900年から1910年にかけて反体制派の新聞や機関誌にもはや作品を寄稿することはなくなるが（その間警察の調書に彼の名はいっさい書かれていない）、彼は別の方法で闘うことを決意したと思われる。つまり、詩を書くことによって。そしてまた政治集会や労組の祝宴や夜の集いに積極的に参加することにより。それらの集会や宴会は各地区のホールや労働組合の集会所や民衆のための施設など様々な場所で行われていた。そこでクテを熱烈に迎えてくれたのは、キャバレーの客層とはまた違う社会層の人びとであった。彼をモンマルトルの袋小路の奥にあったささやかな「パリの民衆の家」*Maison du Peuple de Paris* の夜の集いに招待したヴィクトール・メリックはつぎのように述べている。

彼（＝クテ）はペルス袋小路で、素晴らしい成功を収めた。彼はすぐさま民衆の信頼を勝ち取った。彼の直接的でむき出しの大胆なイマージュに彩られた詩は、人びとの想像力を刺激し、聴衆の心に届いていたのである³⁵。

また半世紀後にある反体制派の闘士はつぎのように当時を回想している。

彼（＝クテ）がパリ労働センターの演壇で「新兵」を朗読している姿を再び目にした

³¹ マルサスのような道徳的・禁欲的産児制限だけでなく、積極的な受胎調節を提唱した。

³² 本然主義 *naturisme* とは19世紀末にブエリエ Bouhélier らによって唱えられた文学理論で、象徴主義とレアリスムとを調和させ、日常性と自然の中にドラマを求めようとした。

³³ Jean Maitron, *Histoire du mouvement anarchiste en France*, SUDEL, 1951参照。

³⁴ Robert de Brécy, *Autour de la Muse Rouge, Groupe de poètes et chansonniers révolutionnaires, 1901-1939*, Christian Pirot, 1991, pp.22-23参照。

³⁵ Victor Méric, *Coulisses et tréteaux : À travers la jungle politique et littéraire*, Paris, Valois, 1931, p.33. Elisabeth Pillet, *op. cit.*, p.70参照。

ように思う。当時は労働組合運動が今よりもっと生彩に富んでいた時代だった。

嗚呼！方言を使った彼の詩の数々を、われわれはみな暗記していたものだ。「木のキリスト」や「浮気女」、あるいは「不良少年」などクテの書いたその他多くの作品はわれわれを熱狂させてくれた。

彼の作品の朗誦を専門にしていた仲間も数人いた³⁶。

このような素人歌手のなかで一目置かれたのが、ブロカ同様後にクテの友となるフェルナン・コラダン Fernand Coladan である。

セクト主義とはおよそかけ離れた存在であったクテは、あらゆる傾向の社会主義の闘士たちや、労働組合運動を推進する反体制派に対していつも協力するのを惜しまなかった。クテのこのような何ものにもとらわれないオープンマインドな態度は、1901年に結成され文化面で大きな役割を果たすことになる、革命的詩人やシャンソニエのグループである《赤いミューズ》La Muse Rouge の姿勢でもあった。反体制派の闘士やプロフェッショナルなシャンソニエたちが集い交流したのがそこであった。クテはこの《赤いミューズ》の創立以来その重要なメンバーのひとりであった³⁷。

以上見てきたように、クテの作品は主に文芸キャバレーの舞台を通して口頭で人びとに伝えられ、そこで得られた収入によって彼は生活の資を稼ぐことができたのである。そしてまた社会主義革命の闘士たちや労働組合運動の反体制派の闘士たちの間にも彼の作品は口承により広まっていったのである。かりにそういった場では収入を得ることができなかつたとしても、生来の気質からして彼にはそういった場に集った労働者たちの方がキャバレーの高級な客層よりも好ましかつたに違いない。印刷媒体による彼の作品の普及もまずはこの同じ二つの異なる場を通して行われたが、その普及の仕方は媒体によりまちまちであった。反体制派の新聞や機関誌の他、とりわけ《赤いミューズ》の活動を通して彼の作品は戦闘的な形で普及していった。しかし1899年から10年あまりの間、彼の作品はとりわけそれを専門に扱う出版業者により作られた《petits formats》という媒体を通して広く普及していったのである。この「プチ・フォルマ」というのは、表紙に作者や歌手のイラストを描き、内側に歌詞と楽譜を印刷した廉価な二つ折りにした紙葉のことで、当時はシャンソンの普及に重要な役割を果たした媒体である。当時は SACEM によりすでに作詞家や作曲家には著作権が認められていたが、「プチ・フォルマ」の場合は、作者から歌詞と楽譜を買い取るとそれらすべての権利はその印刷業者に帰属したのである。まずクテの6篇のシャンソンが1899年にシリーズものとして Blanc-dal-Mutto という印刷業者により『ボース地方の歌』と題して公刊される³⁸。別のもう1篇のシャンソン「愛の牧場」は当時大手の音楽関係の印刷業者であった Enoc 社から発行される³⁹。また翌1900年には『挿絵入りジル・プラス』紙に「罰せられる冒瀆者」が掲載される⁴⁰。それ以降1910年までは、クテはその作品の多くをオンデ

³⁶ André Lorulot, « Le Poète Gaston Couté », *L'Idée libre*, mars 1950. Élisabeth Pillet, *ibid.* 参照。

³⁷ Robert Brécy, *Autour de la Muse Rouge*, *op. cit.* 参照。

³⁸ *Chansons de la Beauce*, de Gaston Couté, dites par l'auteur, Blanc-dal-Mutto, 1899.

³⁹ *Le Pré d'amour*, Enoch, s.d.

⁴⁰ *Le Sacrilège impuni, Le Gil Blas illustré*, 18 mai 1900.

Ondetのもとから発行している。オンデはパリの最も重要な音楽関係の出版者のうちのひとりであり、当時はテオドール・ボトレルの *Chansons de chez nous* が好調な売れ行きを示していた。オンデはクテの作品のいくつかを単独で発行したほか、『不良少年』*La Chanson d'un gâs qu'à mal tourné* という共通のタイトルをつけて、10篇ずつにまとめて「プチ・フォルマ」を4シリーズにわけて全部で40篇の作品を出版している。1902年にクテは、モンマルトルで活躍する新旧の重要なシャンソニエのモノグラフィーを書いたレオン・ド・ベルシーの『モンマルトルとそのシャンソン』の中で簡単な伝記とともに紹介されているが、それによると、オンデはそれらのシャンソンを近々一冊の本にまとめて出版する予定であることが書かれている⁴¹。

このようにクテは社会的にも認められ評価される存在となったのである。彼がキャバレーにおいても、また労働運動の闘士たちの間においても熱狂的に迎えられたのは、彼の作品の独創性によるところが大きかったように思われる。クテはもちろん抒情詩人としての側面も持ち合わせてはいたが、その多くの詩において農民たちを登場人物にして彼が馴染んでいたありのままの方言で語らせるというそれまでだれも用いなかった方法で特異な作品を作り出したのである。クテは農民たちの言葉を通して、それまで軽蔑の対象でしかなかった方言を、色彩豊かで独特の響きをもった文学作品にも堪え得る言語に質転換させ、彼らの生々しい日常世界を描き出すことに成功している。そこでは、過酷さ辛さと同時に憤りや生きる喜びが表現され、写実主義とロマン主義が結合し、個人的な物語が社会的な広がりをもつ問題に拡大し、それら農民の生き様が彼らの日常言語である方言を通して生き生きと力強く描かれている。それはあたかも、それまで貶められてきた方言を、クテは自らの反抗と不服従を断固として貫くための武器として使っているかのようである。ボトレルが牧歌的な昔日の型にはまった「良き歌」*bonnes chansons* を再生産しているときに、クテはそれらの伝統的なエクリチュールに背を向けて、独自の道を歩むのである。

オンデがボトレルとクテという対照的なふたりのシャンソニエの作品を同時に出版したことは意外なことであるように思えるが、しかしこのイデオロギーと美学の折衷主義は、当時のキャバレーの客たちの心性を反映したものに他ならない。彼らはともに同じキャバレーの舞台に立っているのである。ボトレルの圧倒的な人気に比べると、クテの知名度は劣っていたにせよ、彼の反体制的な作品の方を好む客も確かに存在したのである。実際、2年間にわたるドレフュス事件での論争の結果、同じ陣営で同志として闘い合った労働者と知識人は連帯し、そこに思想的交流が生まれていたのである。ドレフュス事件後は、まさしく思想の沸騰の時期にあたっており、世論は左翼に傾いていく時代であった。労働者階級の間で革命的、無政府主義的思想が普及していく中、多数の知識人やリベラルなブルジョワたちもしだいに社会問題に関心を寄せるようになる⁴²。このような世情の中、社会主義思想に共鳴し協調する著名な大学教授も出てくる。そして「人権連盟」*Ligue des Droits de l'Homme* に入会したり、当時次々と誕生した「民衆大学」*Universités Populaires* に関わる社会主義者や急進派の知識人も多くいた。「民衆大学」は1899年から1902年の間にフランス全土で設立される。そこで目指されたのは文化と教育の民主化であり、反教権主義の普及であった。それ

⁴¹ Léon de Bercy, *Montmartre et ses chansons*, op. cit., p.260参照。

⁴² Antoine Compagnon, *La Troisième République des Lettres : De Flaubert à Proust*, Seuil, 1983参照。

により労働者にも知識と文化へのアクセスの道が開かれたのである。クテが「民衆の家」に招かれたときのことを、ヴィクトール・メリックは次のように述べている。

非常に優れた講演者が民衆の家で演壇に立った。その中にはローラン・タイヤード、シャルボネル、クローヴィス・ユークなど多くの学者や芸術家や作家もいた。ドレフェス事件直後の当時、彼らは大衆にとって伝道者の役割を果たしていた。知識人たちは、当時の表現を使えば「民衆のもとへ赴いて」《allaient au peuple》いたのである。

クテがそのことを知るや否や、彼は感激してその招待を受け入れたのである⁴³。

1890年代になると、進歩主義的ブルジョワジーは労働運動の闘士たちと接触し、共通の問題意識を彼らと共有するようになる。一方、彼らと共闘し「社会的芸術」Art socialを追及しはじめる芸術家たちも現れはじめる。世紀の転換期に刊行された群小雑誌のいくつかにもそうした傾向が窺える⁴⁴。ピサロ Pissarro やリュス Luce, あるいはシニャック Signac やグランジュアン Grandjouan, クプカ Kupka などの画家やイラストレーター、あるいはまた革命思想と芸術とを結びつけようとして1901年に創刊された『ラシエット・オ・ブール⁴⁵』L'Assiette au beurre に協力した挿絵画家たちがそうした傾向を示した。これらの芸術家は比較的多くの進歩主義的ブルジョワジーに支えられたおかげで、十分生計を立てていけるだけの収入を得ることができた⁴⁶。

このようにボース地方からパリにやって来た若きシャンソニエ詩人は、自らの筆によって生計を立てていけるようになる。彼は他の多くのシャンソニエたちとは違い、副業を持つこともなくキャバレーの収入（警察の報告書によると1900年の彼の出演料は1日10～12フランであった。）と、少なくとも上京した当初は両親からの援助によって暮らしていくことができたのである。当時クテはモンマルトルの陽気なbohémien生活を送っていた。それは不如意ではあるが夢と芸術と友情に満ち、日々酒を飲みながら仲間と議論を戦わす自由気ままな生活であった。クテはホテルに滞在したり家賃の安い部屋を借りたりして暮らし、夜になると居酒屋でみんなに気前よく奢って前日稼いだ出演料をすべて使い果たすという日々を送

⁴³ Victor Méric, *Coulisses et tréteaux*, op. cit., p.33参照。

⁴⁴ *L'Enclos*, *La Revue naturiste*, *L'Effort*などがそれである。Madeleine Rebérioux, *La République radicale? 1898-1914*, Seuil (coll. « Histoire »), *Nouvelle Histoire de la France contemporaine*, t. II, 1975参照。

⁴⁵ *L'Assiette au beurre* はハンガリーからフランスに帰化したユダヤ人、シュワルツ Schwarz によって1901年に創刊された週刊の絵入り風刺雑誌である。原義は「バター皿」であるが、「うまい汁」という政治的利権を示す俗語として用いられた。1912年まで発行され続け、一時中断し1921年から月刊誌として第2シリーズが再刊されるが、1936年に廃刊となる。1901年4月4日に刊行された創刊号は、すでに挿絵画家として有名になっていたテオフィル・スタンランが表紙絵を描き、ジャン・ヴェベ、アドルフ・ヴィレット、シャルル・レアンドル、ジョソなどの有名な挿絵画家の絵が掲載された。当時のフランスの世相は軍備拡大やプロシアに対する報復を主張する国粋主義の主張、労働運動や女性運動など急進的な思想の流行をみた時代であったことから、しばしば無政府主義的な主張がみられた。

⁴⁶ 『ラシエット・オ・ブール』の発行者シュワルツは、オンデ同様、革命思想の信奉者というよりは抜け目のない商人だったようで、顧客の多くは裕福なブルジョワジーであった。Michel Dixmier, « L'Assiette au beurre, revue contestataire et artistique », *Jules Grandjouan*, *ibid.* 参照。

る。金欠病のときは、馴染みの居酒屋でつけで飲み食いしたり、芸術家に援助の手を差し伸べてくれる商店主やホテル業者の寛大さに頼ることもあった。このようにクテは同業者のシャンソニエ仲間や芸術家や若き作家たちのみならず、ジャーナリストや革命的労働運動の活動家たちと、大酒を飲みながら談論風発の日々を送るのである。当時自ら描いたデッサンやシャンソンによって細々と生計を立てていたピエール・マッコルラン Pierre Mac Orlan もその中のひとりである。マッコルランは数か月の間、クテと挿絵画家のジュール・ドゥパキ Jules Depaquit と、テルトル広場にあったホテルブスカラ hôtel Bouscarat で寝泊まりを共にした仲でもある。その間3人の友はほとんど離れることもなく生活を共にしていた。マッコルランは往時を偲んで次のように述懐している。

モンマルトルの商店主たちは並外れた寛大さを示してくれた。今日ではあのような素晴らしい人たちには再びお目にかかれないのではないかと思う。彼らは芸術家をこよなく愛し、いくらでもつけで飲み食いさせてくれたものだ。彼ら自身も自由奔放に生きていた。長い間若者たちに残すことになったこのモンマルトルの印象を作り出したのは、《シャ・ノワール》でもなければその模倣店の数々でもない。この仲間意識と無頓着さと自由が支配する素晴らしい雰囲気は、ソール通り rue des Saules やノルヴァン通り rue Norvins, あるいはラブルヴォワール通り rue de l'Abreuvoir の商店主たちによって作られたものである。僕の旧友トニー・タヴォ Tony Taveau は、クテと僕と一緒にかなり困窮した生活をテルトル広場とマン＝シュール＝ロワール近くのルドン＝レ＝モーヴ Roudon-les-Mauves の家で過ごした仲だが、彼はノルヴァン通りの果物屋の主人ベルノワ Bernois への友情に満ちた思い出をずっと持ち続けていた。それはあの素晴らしい男にあっては当然のことである。

ベルノワの家では、食卓はいつもランプの明かりに照らされていた。その食卓の主は、彼のパンとワインと財布を彼が評価していた人たちと分かち合っていた。なぜなら彼の想像力は彼らが語る話に掻き立てられ感動していたからである。クテはその食卓でしばしばパイプを燻らせていたものだ⁴⁷。

夏のテルトル広場は、仕事しすぎることを忘れさせて、生きる喜びの明確なイメージを提供してくれた。ブスカラのレストランでは、いくつかの決められたテーブルがしつらえられた。そのうちのひとつはドゥパキとクテと「僕たちの二つの心」*Nos deux cœurs* というあの美しいシャンソンを書いたリュカのテーブルであった。その隣のテーブルでは、エリック・サティとマックス・ジャコブが、ドゥロー Delaw やユッテル Utter をはじめ他の客たちとともに静かな通りの敷石をじっと眺めていた⁴⁸。

ルイ・ラノズブレのクテの伝記や、第一次世界大戦後に盛んに書かれたモンマルトルの回想録などに、当時のクテとその友人たちの興味深い逸話が残されている。すなわち、彼らの

⁴⁷ Pierre Mac Orlan, *Villes : Montmartre*, chap. IV, 1927. Lucien Sérour, « Gaston Couté dans l'œuvre de Pierre Mac-Orlan », *Les Amis de Gaston Couté*, Meung-sur-Loire, n° 32, 1973から引用。

⁴⁸ Pierre Mac-Orlan, *Montmartre*, 1946. Lucien Sérour, *ibid.*

突飛な行動や数々の災難、あるいは慢性的な不如意にもかかわらず人生を謳歌し楽しむために彼らが思いついた弥縫策などである。以下がその一例である。

われわれは時折彼（＝クテ）の夕食に誘われた。ただし食料とナイフを持参するという条件付で。なぜなら彼はナイフを一本しか持っていなかったからである。ワインについては、彼は思う存分それを調達する任を引き受けた。その方法は以下のとおりである。

居酒屋と奥の部屋とを隔てる扉の所に大きなワイン樽が置かれていた。クテが思いついた最良の策はといえば、錐でもって樽の壁面に穴をあけ、そこに蛇口を差し込むことだった。

この巧妙なアイデアのおかげで、彼は好きなだけワインを樽から注いで招待客たちと飲む存分それを味わうことができたというわけである。この行為を彼のご先祖さまのフランソワ・ヴィヨンも決して咎めることはなかったであろう⁴⁹。

夏にキャバレーが店を閉めると、クテはマン＝シュール＝ロワール近郊の家を地元の農民から借り、郷里の友人たちと再会したり、パリの仲間たちの訪問を受けたりした。そのようなときには、彼らと連れ立って近隣を散歩したり、釣りや狩りを楽しんだり、ロワール河流域を散策したりして過ごした。そして最後は決まって友人たちと酒を飲みながら談笑するのが常であった。クテは地元ではむしろ「不良少年」として見られ、決して良く思われていなかったが、モーリス・フロチエ Maurice Frottier、ギュスタヴ・セジュールネ Gustave Séjourné、ジョゼフ・ヴェイヤール Joseph Veillard などの忠実な友も何人かいた。彼の両親とはといえば、息子がパリで選んだ職業については理解を示していなかったが、彼が帰省したときはいつも暖かく迎え入れてくれた。こうしてクテは毎夏帰省して、故郷の田舎の風景や自然を再発見し、農民たちとの再会を心から喜んだ。彼らの話し方や物事の捉え方、そして何よりも彼らの使うイメージ豊かな言語こそがクテのエクリチュールの最も重要な源泉となっている。クテは彼らの使う表現に興味を覚えると、それをメモに取りさえした。地元の文化活動や政治集会に誘われたときは、クテは決してそれを断わらず協力を惜しむことはなかった。彼の友であるとともに賛美者のひとりであったギュスタヴ・セジュールネは、マン＝シュール＝ロワールの近くのサン＝テ Saint-Ay の村長をしており社会主義者であった。セジュールネは1908年7月14日の革命記念日の式典のために、平和主義に則った新たなマルセイエーズを書いてくれるようクテに依頼する。こうして出来上がった作品が「農婦、サン＝テの少年たちの友愛のマルセイエーズ」*La Paysanne, Marseillaise fraternelle des gâs de Sait-Ay* である。

こうして冬はモンマルトル、夏は故郷のマン＝シュール＝ロワールという彼の生活パターンはほとんど変わることはなかった。時には彼の作品で大きな位置を占めている放浪者よろしく、クテはランボーのように徒歩で気ままな遠出をすることもあった。1899年晩夏に彼がモンマルトルの友モーリス・リュカと企てた放浪の旅もそのひとつである。そのときの様子

⁴⁹ René Devilliers, *Butte, Boul' Mich & C^{ie}, Souvenirs d'un chansonnier*, Nantes, Aux portes du large, 1945, p.35. Élisabeth Pillet, *ibid.*, p.74参照。

はリュカが地方紙に書いた記事によりその詳細を知ることができる。クテはマン＝シュール＝ロワールに訪ねてきたこのモンマルトルの友と連れ立って、かつて彼が地方興行のため立ち寄り多くの知人を得たシャトールー Châteauroux へと向かい、そしてその後、友人の画家たちが彼らを招いてくれたガルジレス Gargillesse へと旅立つ。電車賃が不足していたため彼らは徒歩で気ままな旅を続けることとなる。二人は道中立ち寄った先々のカフェで住民たちが催してくれた夜会において、クテは詩を朗誦し、リュカの方はパステル画を素描して滞在費を賄った。彼らの興行のことは、町の太鼓とポスターにより住民たちに知らされた。彼らのパステル画と詩は、夜会の最後に行われたくじ引きによって観客たちに手渡された。彼らの徒歩旅行は、友人たちの家に立ち寄りたりして数週間にわたって続いた。ある時は髪をぼさぼさにした二人の放浪芸術家は快く迎えられたが、ときには村長が彼らの興行を許可しないこともあった。また彼らは嫌疑をかけられて、憲兵たちに尋問を受け連行されそうになったこともある。その時はクテが自作の詩を朗誦することで、二人は危うく難を逃れることができた。ある夜などは、クテの朗誦した反軍国主義の詩に憤った愛国主義の観客から激しく食ってかかれたこともある⁵⁰。リュカはクテが亡くなったときの追悼記事で、彼らが冬にイヨンヌ Yonne で決行した別の徒歩旅行のことに触れているが、詳細は不明である。

4. クテの交友関係

このようにクテはパリに出るとすぐに頭角を現し、モンマルトルの生活にすっかり溶け込んでいった。自由で独立独歩の精神に満ちていたその地で、クテは多くの芸術家や詩人と出会い、何人かの親友を得ることができた。そのなかでも特に親しかった友人としては、すでに上で紹介したモーリス・リュカの他に、60の齢に達しながら壮健かつ豪快で《赤いミュージック》のメンバーだった無政府主義者ポール・パイエット Paul Paillette、シャンソニエ仲間ではキャバレー *les Quat'Arts* の主要メンバーのひとりであったドミヌス Dominus やドレフュス擁護派で社会主義者のルイ・マルソロー Louis Marsolleau が、さらにはモンマルトルのボヘミアンたちのなかでもとりわけ風変りな文学士トニー・タヴォー Tony Taveau などがいた。タヴォーは何人かのジャーナリストや著名な政治家のゴーストライターをしていた男で、彼は辻馬車で送られてくる特別郵便を受け取り、彼らから依頼された記事や演説原稿を手狭な自室で起草していた。気まぐれな性格で、ある時はしかめ面をし、またある時は元気潑刺としていた彼は大の酒豪でもあった。クテとタヴォーは一時期、モンマルトルの小さな家を二人で借りて生活を共にしていた。タヴォーはまた何度かマン＝シュール＝ロワールにやってきて、クテとひと夏を一緒に過ごした仲でもある。その他クテの友人には、すでに上で触れたようにマッコルランやマックス・ジャコブといった作家や詩人、それにシャンソニエのグザヴィエ・プリヴァ Xavier Privas、あるいは芸術誌『狼』*Les Loups* を中心に活動していたグループのリーダーであったアナトール・ベルヴァル＝ドラエー Anatole Belval-Delahaye などがいた。

クテはまた極左の闘士やジャーナリストの中にも友人をもっていた。すでに触れたセバスチャン・フォールやフェルナン・コラダンの他にも、当時名の知れた無政府主義の扇動者で

⁵⁰ Élisabeth Pillet, *ibid.*, pp.75-76参照。

あったリヤール＝クルトワ Liard-Courtois ことオーギュスト・リヤールもそのひとりである。彼はその扇動的な闘士活動のために何度か有罪判決を受け、フランス領ギアナのカイエヌの徒刑場で5年間流刑の憂き目を見た後、1900年によく恩赦に浴した人物である。また、クテと同じようにロワール地方出身で社会主義者のジャーナリストであったフェルナン・デプレ Fernand Desprès や、既述したように新マルサス主義の喧伝者であった反体制派のウジェーヌ・アンペール、それに *Libertaire* 紙や *les Hommes du jour* 誌、さらには *Guerre sociale* 紙に寄稿していた無政府主義の文人ジャーナリストであったヴィクトール・メリックなどもクテの親友であった。

画家やイラストレーターの中でクテと最も親しかったのはジュール・ドゥパキである。彼は気まぐれなボヘミアン生活を送っていたアナーキーな挿絵画家で、後に *La Vache enragée* の編集にも携わり、モンマルトルを《commune libre》としてフランスから分離独立させる運動の推進者のひとりとなった人物である⁵¹。クテはまた *L'Assiette au beurre* の最も有名な挿絵画家のひとりでもあった前衛画家のフランティセック・クプカ Frantisek Kupka や、「エコール・ルーアン」の新進気鋭の若き画家ピエール・デュモン Pierre Dumont とも親交を結んだ。クテのシャンソンの挿絵画家のうち最も重要なのは、社会活動にも積極的に関わった2人の無政府主義者の芸術家である。そのひとりにはオンデにより出版されたクテの最初の「プチ・フォルマ」シリーズの10点中5点に石版画による挿絵を描いた、ナビ派の風刺画家アンリ＝ガブリエル・イベル Henri-Gabriel Ibels である。オンデが後にクテの作品を一冊の本にまとめて刊行する際に、挿絵を依頼したのもイベルにであった。そしてもうひとり、クテの10篇あまりのシャンソンに挿絵を描いた当時最も有名な風刺画家のひとりであったジュール・グランジュアン Jules Grandjouan である⁵²。

最後に、音楽関係者の中でクテと親密な交友関係を結んだのは、彼のシャンソンの歌手であったレイモン・ブロカ Raymond Broka、カステロ Castello、コラダン Coladan などが、作曲家の中では、クテ作品の歌手でもあったシュルジュール Surgères、キャバレー *les Quat'z'Arts* のオーケストラ指揮者であったウジェーヌ・マネスコ Eugène Manescau、そして、コンセルヴァトワールで音楽教育を受けた後キャバレーの世界に入り、ブリュアンの店などでピアニスト兼歌手として活躍した有名なレオ・ダニデルフ Léo Daniderff などが挙げられる。ダニデルフは当時いくつかの大ヒットしたシャンソン曲を書いた作曲家としても知られている。

一方、クテと同時代に活躍したシャンソニエの中で、いくつかの点で彼と類似する特徴をもった作品を書いているにもかかわらず、交友関係をもたなかった人もある。ジャン・リクテス Jehan Rictus もそのひとりである。マン＝シュール＝ロワールのクテ記念館に、後にクテの作品集も出版することになるリクテスの友人であると同時に彼の作品の出版者でもあったウジェーヌ・レ Eugène Rey の手紙が所蔵されているが、それによるとクテとリク

⁵¹ 筆者が科研で度々訪れたモンマルトル美術館に、ドゥパキをはじめ当時の画家やイラストレーターの貴重な資料が展示されている。

⁵² その他、プルボー Poulbot、スタンラン Steinlen、マッコランなどがクテのシャンソンに挿絵を描いているが、いずれも1～2点にとどまっている。Lucien Sérour, « Les illustrateurs de Gaston Couté », *Les Amis de Gaston Couté*, n° 31 à 37参照。

チュスはお互いに面識はあり、キャバレーでも同じ舞台に立ったこともあり、年長のリクチュスはクテの才能を認めていたにもかかわらず、友情を結ぶことはなかったという。他方クテのリクチュスに対する言及とはいえば、クテの死後に *La Guerre Sociale* 紙に掲載された風刺画しか知られていない。「貧乏人の独り言」*Soliloques du pauvre* の作者リクチュスは、その風刺画で「涙の泉」に戯画化されている⁵³。

1893年のパリ市議会議員選挙で社会主義者として当選を果たし、1898年と1902年にも再選された詩人クローヴィス・ユグ Clovis Hugues も、クテと出会う可能性が高かったキャバレー *les Quat'z'Arts* に出演していたにもかかわらず、二人の交友関係を示す記録は残されていない。

また、クテと同じように製粉業者の息子で、当時その作品が社会主義運動の反体制派の闘士たちの間で持てはやされていたジャン・バティスト・クレマンとの接点も不思議と見出すことができない。クレマンは当時すでに60歳代に達していたとはいえ、1903年に亡くなるまで活発な社会活動を続けていたことから、当然クテと知り合う機会があったはずである。当時クレマンのシャンソンの作曲を手がけていたウジェーヌ・マネスコ Eugène Manescau は、クテの作品にも曲を提供しており、1898年からはマネスコはモンマルトルに社会主義関係の書籍を扱う書店を開き、特にシャンソンの普及に力を入れていた。また彼は1900年にモンマルトルのペルス袋小路の「民衆の家」の管理責任者も任されていたのである。クレマンは1897年から98年にかけて、社会主義者のジャーナリストとして *La Petite République* 紙上に毎週いくつかの時事的シャンソンを載せており、そのなかのひとつに「新兵たち」*Les Conscrips* と題したシャンソンがある。ところでクテも1899年11月に *Journal du peuple* 紙に、表現の仕方や形式は異なるものの、同じタイトルをつけた反軍国主義をテーマにした詩を発表している。クテの書いたこの「新兵」という詩は、社会主義の闘士たちの間のみならず、それを超えて一般大衆の間でも知られた作品であったことがわかる。というのも、これはオンデが「プチ・フォルマ」で発行した最初のクテ作品であったからである⁵⁴。1900年にオンデは「新兵」を含むクレマンのシャンソン集を世に出す。それに付されたスタンランの挿絵と、クテの作品集につけられたイベルの挿絵は不思議とよく似通っている。このことからオンデは同じタイトルを付した二人の詩人の作品を意識的に関連づけようとしたのではないかと推察されるのである。もしそうであったとしても、オンデのこのいわば商業戦略に対する二人の反応は知られていない。いずれにせよ、クレマンの社会主義ジャーナリストとしての労働組合運動への積極的参加は、1888年から1895年にかけて最も活発に展開されたのであり、クテがパリに上京して同じように無政府主義的労働運動に積極的に関わる前のことであったことから、二人が交友関係を結ぶに至らなかったと思われる。文学界においては、シャルル＝ルイ・フィリップとの交友以外は、それほど親密な親交は育まれなかったようである。

このように多くの友人を得た一方で、クテは逆に反感を持たれることもしばしばあった。なぜなら、この陽気で友好的な若者は酒に酔うと辛辣な皮肉屋に一変し、非難や嘲弄で相手

⁵³ Élisabeth Pillet, *op. cit.*, p.77参照。

⁵⁴ クテの「新兵」*Les Conscrips* は、E. Boyer が1934年に「サラ・ベルナル」劇場で朗読した他、1957年に Yves Deniaud が、1963年に Francis Cover がレコード録音している。

を攻撃し傷つけることもままあったからである。彼の同業者仲間の中には彼の嘲笑の的になった人物も複数いたが、特にガブリエル・モントヤ Gabriel Montoya とマルセル・ルゲ Marcel Legay の二人が標的にされた。クテのやり玉にあげられたこの二人は、ともにとりわけロマンスの作者として知られたシンガーソングライターであるが、彼らは若きシャンソニエ詩人の皮肉や嘲笑を意に介していなかったようであった。ルゲはブケ Boukay の『赤いシャンソン』*Chansons rouges* の作曲者として知られていたが、嘲笑の的となりながらクテの作品にも何曲か音楽を提供している。その他にもクテの標的にされたシャンソニエはいたが、彼らの回想によると、この若きシャンソニエ詩人はその辛辣な風刺によって「凡庸でブルジョワ化した」シャンソニエたちから恐れられた存在であったという⁵⁵。彼の友人のそれも含めて彼をめぐるすべての証言は、クテが頑固一徹で怒りっぽい性格であったことで一致している。誇り高い人物だった彼は、時と場合によっては傲慢な態度を取ることもあった。彼の作品に窺える愛情深さと豊かな感受性は、現実の人間関係においては、少なくとも付き合い始めた当初は異なる態度となって表れたようである。クテは彼に敵対する相手に対してはすぐに挑発的態度を示し、礼儀作法や社交辞令に対しては軽蔑の念しか抱いていなかった。クテの伝記を書いたルイ・ラノワズレはつぎのようなエピソードを紹介している。

ガストン・クテは、舞台上で歌った後で彼のもとに祝福にやってくるすべての賞賛者たちを毛嫌いしていた。彼は社会党の地方支部で催された行事への参加を承諾していた。彼は舞台での公演の後で彼を取り囲み、そこから逃げ出せなくなってしまう、しつこく付きまとううるさい連中には辟易していた。

ゆえに彼は、その公演の日が来る前にその場所を事前に下調べに行った。彼はそのとき大きな建物に沿った道に通じている小窓に気づいた。そこで彼は友人のプロチエに頼んで、彼の公演の最後の詩の朗誦が終わったらすぐにその場所で彼を待っていてくれるよう打ち合わせた。

そしてそれは実行された。その窓は静かに開き、クテの顔がそこから現れた。彼が手すりを跨ぐと、背の高いたくましい友が彼の身体を両手でしかと受け止めた。

雲隠れしてしまったクテの姿を会場で観客たちがむなしく探しているうちに、二人の相棒は群衆の喧騒から遠く離れて、ロワール河のほとりを楽しげに散歩していたのである⁵⁶。

また別の証言によれば、クテはある夕食会で大酒を飲んだ後、出演料のお金を歩道に叩きつけて、「汚らしい金よ、世界が不幸なのはこの忌々しい金のせいだ。」と叫んだという⁵⁷。クテにあっては、金や物質的快適さに対する拒絶は、時として断固たる不便さの選択にまで至ることもある。かくして彼は何度か寝心地のよいベッドよりも、床や鉋屑の上に寝ることの方を好むこともあった。彼が度々決行した徒歩旅行は、必要に迫られてというより

⁵⁵ René Devilliers, *Butte, Boul'Mich & C^e*, *op. cit.*, p.34参照。

⁵⁶ Louis Lanoiselée, *Gaston Couté*, *op. cit.*, pp.71-72参照。

⁵⁷ Roger Monclin, *Gaston Couté, poète maudit (1880-1911)*, *Pensée et action*, Paris / Bruxelles, 1962, p.23参照。

はむしろ、冒険欲や最低限の費用により気ままなその日暮らしの質素な生活を求めた結果であるように思われる。クテの二人の親友は、そのようなシャンソニエ詩人の人となりをつぎのように言い表している。

思うに、だれもガストン・クテの性格の深部を理解できるものはいなかった。おそらく彼自身も自分のことを完全に分かってはいなかった。ジュール・ヴァレスといえども、これほど断固たる不屈の反抗者を描くことはなかった⁵⁸。

ガストン・クテは反抗者であり、皮肉屋であり、言語の暴行者であった。しかし実際は、すべての打算なき暴行者のように、彼は黄金の心と無辺の善良さをもっていた⁵⁹。

5. おわりに

以上見てきたように、クテは絶対と自由を希求し、あらゆる妥協を拒絶し、功名心とは無縁な存在であったが、同時に友情に厚く、皮肉屋で気まぐれ、笑い上戸で突飛な企てをいつも思いめぐらしている陽気な人物であった。一方、彼はまた頑固で激しやすく、酪酊すると攻撃的になり、相手に平気で皮肉を浴びせたり嘲笑したりする乱暴な一面も持っていた。何度か経験した女性との恋愛関係もうまくいくことはなく、どれも長続きしなかった。彼は飲酒癖のせいで病気の不安を常に抱えていたが、治療することをいつも拒んでいた。1900年、20歳になった彼は徴兵審査委員会で虚弱体質のため徴兵を延期され、1902年に気管支炎のため兵役を最終的に免除されている。このときに診断された気管支炎という病気は、後に百日咳や肺炎などの急性肺疾患の発症にも繋がる前兆でもあったのである。こうした常に付きまとう病気の不安に加えて、生活するためとはいえ、クテが断固としてその価値観と生活様式を拒否した社会階級に属していたブルジョワジーの観客を前にして舞台に立たねばならなかった重圧が彼に重くのしかかっていた。このためクテはいつも人知れず不安や苦悩に苛まれ、彼がキャバレーの舞台に立つときは、親しい友に頼んで舞台の傍で彼を見守り支えてもらうこともしばしばあった。こうした精神的苦痛や生きるうえでの困難さが、彼をして飲酒への逃避を促したであろうことは想像に難くない。モンマルトルでボヘミアン生活を送っていた芸術家たちは、みな酒をよく飲んだことは事実である。しかし、パリに上京してすぐに、20歳でアルコール依存症になってしまった若きシャンソニエ詩人クテは、そのために自らの生を消し死期を早めてしまったことは否めない。

1911年6月、クテはサン＝マルタン通りのキャバレー *les Adrets* に出演する。しかし公演後、彼は疲れ果て呼吸困難に陥り、しばらくは一進一退の状態が続くが、ついにある夜ラリボワジュール Lariboisière 病院に救急搬送された翌日、1911年6月28日、彼は肺充血のため永眠する。享年30歳の若さであった。

本稿は、日本学術振興会の科学研究費補助金による研究課題「19世紀後半パリにおける出版物とシャンソンとの影響関係」(平成29年度～令和2年度基盤研究C, 研究代表者: 吉田

⁵⁸ Dominus, « Gaston Couté », *Nos Vedettes d'hier et d'aujourd'hui*, 1^{er} mars 1932参照。

⁵⁹ Maurice Dauray, « La boîte aux souvenirs : Gaston Couté », *Le Gargailou*, n° 3, 15 juin 1925参照。

正明) の研究成果の一部を発表したものである。

(2020年10月30日受理, 11月11日掲載承認)

